

執筆者紹介（2016年3月31日現在。執筆者順、*は編者）

井上 彰（いのうえ・あきら）

立命館大学大学院先端総合学術研究科准教授。政治哲学・倫理学。共編著に『実践する政治哲学』（ナカニシヤ出版、2012年）、『政治理論とは何か』（風行社、2014年）。論文に「機会の平等・再考——正義の観点から」（齋藤純一編『政治の発見3 支える——連帯と再分配の政治学』風行社、2011年）など多数。

堀田義太郎（ほった・よしとろう）

東京理科大学理工学部講師。倫理学・政治哲学。著書に『差異と平等』（共著、青土社、2012年）。論文に「差別の規範理論——差別の悪の根拠に関する研究」（『社会と倫理』29号、2014年）、「リベラリズムとフェミニズム——ケアを誰がどう担うべきか」（大越愛子・倉橋耕平編『ジェンダーとセクシュアリティ——現代社会に育つまなざし』昭和堂、2014年）など。

村上慎司（むらかみ・しんじ）

立命館大学大学院先端総合学術研究科研究指導助手。社会保障論・経済哲学。論文に「グローバルな正義と健康——ケイパビリティの観点」（『日本医療経済学会会報』31巻1号、2014年）、「The Financial Feasibility of Basic Income and the Idea of a Refundable Tax Credit in Japan」（in T. Yamamori and Y. Vanderborcht eds., *Basic Income in Japan: Prospects for A Radical Idea in A Transforming Welfare State*, Palgrave Macmillan, 2014）、「健康の社会的決定要因としてのソーシャル・キャピタルの規範理論——リベラル・コミュニティアン論争の含意から」（『倫理学研究』44号、2014年）など。

篠木 涼（しのぎ・りょう）

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員。視覚文化論・心理学史。論文に「アメリカ初期心理学におけるミュンスターバークとウィグモアの論争——大衆への訴えかけと専門家との関係から」（『立命館人間科学研究』33号、2016年）、「大衆化する心理学における『セルフコントロール』の登場——ジョセフ・ジャストロウを中心に」（『立命館人間科学研究』32号、2015年）、「The Reception of Hugo Muensterberg's Psychology and Film Theory in Japan」（*Ars Vivendi Journal*, 6, 2014）など。

*中倉智徳（なかくら・ともりのり）

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員（生存学研究センター所属）。社会学史・社会思想史。著書に『ガブリエル・タルド——贈与とアソシアシオンの体制へ』（洛北出版、2011年）。論文に「イノベーション、社会、経済——ガブリエル・タルドと戦間期アメリカにおける『発明の社会学』（『年報 科学・技術・社会』24巻、2015年）、「19世紀末フランスにおける『科学の哲学』としての社会学——ガブリエル・タルドのネオ・モノドロジェー成立過程」（『フランス哲学・思想研究』20巻、2015年）など。

角崎洋平（かどさき・ようへい）

日本学術振興会特別研究員PD・生存学研究センター客員研究員。福祉政策・福祉理論。著書に『体制の歴史——時代の線を引きなおす』（共編著、洛北出版、2013年）、『マイクロクレジットは金融格差を是正するか』（共著、ミネルヴァ書房、2016年）。論文に「選択結果の過酷性をめぐる一考察——自由・責任・リベラリズム」（『立命館大学言語文化研究』24巻4号、2013年）など。

谷村ひとみ（たにむら・ひとみ）

立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC2。社会学・発達心理学。著書に『TEMでわかる人生の径路——質的研究の新展開』（分担執筆、安田裕子・サトウタツヤ編、誠信書房、2012年）、『対人援助学を拓く』（分担執筆、村本邦子・土田宣明・徳田完二・春日井敏之・望月昭編、晃洋書房、2013年）。論文に「正規雇用に就いた離別シングルマザーの自立した老後設計は可能か——選び取っていく『働けるまで働く』というひとりの老後」（小林宗之・谷村ひとみ編『生存学研究センター報告19 戦後日本の老いを問い直す』、2013年）など。

倉橋耕平（くらはし・こうへい）

関西大学・近畿大学・大手前大学・成安造形大学非常勤講師。社会学（とくにメディア論・情報社会論）。著書に『ジェンダーとセクシュアリティ——現代社会に育つまなざし』（共編著、昭和堂、2014年）。論文に「〈性奴隷〉は新聞報道にどのように登場したか——1991 - 92年の国内紙・英字紙を中心に」（大谷通高・村上慎司編『生存学研究センター報告21——生存をめぐる規範 オルタナティブな秩序と関係性の生成に向けて』、2014年）、「NHK『ETV2001』番組改編裁判の争点——判決文の背後にある『自由』の分析から」（『マス・コミュニケーション研究』74号、2009年）など。

* 藤原信行（ふじわら・のぶゆき）

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員。知識社会学・家族社会学・医療社会学。著書に『自殺と向き合う』（分担執筆、浅野弘毅・岡崎伸郎編、批評社、2009年）。論文に「『あなたもGKB47宣言』における自殺をめぐる規範的秩序——争点としての、自殺（者）カテゴリーの『述語』」（大谷通高・村上慎司編『生存学研究センター報告21——生存をめぐる規範 オルタナティブな秩序と関係性の生成に向けて』、2014年）、「自殺動機付与／帰属活動の社会学・序説——デュルケムの拒絶、ダグラスの挫折、アトキンソンの達成を中心に」（『現代社会学理論研究』6号、2012年）など。

櫻井悟史（さくらい・さとし）

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員。歴史社会学・犯罪社会学。著書に『死刑執行人の日本史——歴史社会学からの接近』（青弓社、2011年）、『体制の歴史——時代の線を引きなおす』（共編著、洛北出版、2013年）。論文に「日本における体罰論の批判的精査とスポーツ体罰の倫理的検討」（共著、『生存学』8号、2015年）など。

安 孝淑（あん・ひよすく）

立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程。社会福祉学・家族社会学。論文に「韓国におけるALSの人を支援する制度の現在とその改善可能性」（『立命館言語文化研究』26巻4号、2015年）、「ALS患者をめぐる支援制度の日韓比較——難病・障害支援制度と介護保険制度の分析を通じて」（『Core Ethics』9号、2013年）、「韓国ALS患者の意思伝達をめぐる状況と課題」（『Core Ethics』8号、2012年）など。

安部 彰（あべ・あきら）

大阪市立大学ほか非常勤講師。哲学・倫理学。著書に『連帯の挨拶——ローティと希望の思想』（生活書院、2011年）、*Begriff Unt Bild Der Modernen Japanischen Philosophie*（分担執筆、Herausgegeben von Raji C. Steineck, Elena Louisa Lange und Paulus Kaufmann, Frommann-Holzboog, 2014）。論文に「日本における体罰論の批判的精査とスポーツ体罰の倫理的検討」（共著、『生存学』8号、2015年）など。